

17	刈谷	刈谷市立平成小学校	コイデ トモヤ
分科会番号	1 1	分科会名	名前 小出 智也
		保健体育 ( 体育 )	

**研究題目**

仲間と関わり合い、課題を解決する中で、できる喜びを実感する体育学習

**研究要項**

**I 主題設定の理由**

近年、社会や生活環境の急速な変化は、児童の遊びや運動に対する意識に大きな変化をもたらしている。積極的に運動に取り組み、体を動かすことを好む児童と、体を動かすことを好まず運動の基本技能が身に付いていない児童の二極化が進んでいる。運動に取り組む中でできる喜びが実感できず、運動に対する自信を深めることができない児童が多い。また集団生活のルールを守れない子、友達との人間関係を築くことが苦手な子が増えている。こうした状況の中、学校体育では、運動に対する基本技能の向上や仲間との協調性、思いやりの心の育成が重要であると考え、日々の実践を積み重ねてきた。

昨年度行ったキャッチバレーボールでは、身体能力が高く、勝敗にこだわる子が、自分が活躍したいという気持ちを優先してしまい、失敗した子を責めたり、点数の差が開いてくるとやる気をなくしてしまったりと、自己中心的な行動や発言が見られた。それによって、運動が苦手な子と関わり合うことが少なくなり、苦手な子は得意な子に任せきりになってしまう姿が見られた。こうした昨年度の実態から、バレーボールに関するアンケートを実施した(資料1)。児童たちは、「チームで協力してパスが繋がったとき」や「アタックを決めることができたとき」に楽しさを感じている。逆に「アタックが決められないこと」に難しさを感じ、「グループの仲間や相手グループともめてしまうこと」につまらなさを感じている。実際にバレーボールを行っているところを見ると、ボールの動きに合わせている児童は少なく、落下点に入る意識は低いと感じた。

このような実態から、アタックが打ちたいという子どもたちの楽しさにつなげるために、まずは、ボールを落とさないこと、ボールの落下点に入ることの重要性に気付かせ、仲間と協力してボールをつなぐことの大切さを感じる経験をさせたい。そこで、仲間と関わり合いながら、段階的に学習に取り組み、技能の高まりを感じられる単元にするすることで、自らの課題を解決していきながら、できる喜びを感じて楽しんで運動が行えるようにしたいと考えた。

以上のことをふまえて、研究主題を「仲間と関わり合い、課題を解決する中で、できる喜びを実感する体育学習」と設定した。

**II 研究の構想**

**1 めざす児童像**

- 仲間との関わり合いを通して課題を解決することができる児童
- 意欲的に運動に取り組み、技能を高め、できる喜びを実感する児童

**2 研究の仮説**

めざす児童像に迫るために、次のような仮説を立て、研究を進めることにした。

- 【仮説1】 ルールやコート工夫したり、教え合いや話し合いの場を設定したりすることで、仲間と関わり合いながら課題を解決することができるだろう。
- 【仮説2】 プロから学ぶ機会を設けたり、パターン練習やグループ練習など練習方法を工夫して実施したりすることで、意欲的に運動に取り組み、技能を高めて、できる喜びを実感するだろう。

**3 具体的な手だて**

**(1) 仮説1に対する手だて**

**① コートの工夫**

本単元では、児童の練習の場を確保するために、各グループに1コートずつ練習用のコートを用意する。コートを9つのエリアに区分けし、場所を視覚的に分かるようにする(資料2)。これにより、ボールの落下位置の予測や守備のフォーメーション、仲間へのパスを出す位置について確認することができ、仲間と関わり合いながら課題を解決することができるだろう。

**② ルールの工夫**

本単元では、毎回の授業の中で、成果を確かめる場としてゲームを行う。その中で、特別ルールを設ける(資料3)。「相手のアタックをキャッチすると1点加算される」を設定することで、児童たちの、諦めずにボールを拾おうとする気持ちやボールの落下点へ入る意識を高める。また、「ボールを一人一回触って、3回で返球する」を設定することで、コートにいる児童は必ず1回ボールに触れることとなり、触球数が増え、

**資料1 単元前アンケート結果**

※バレーボールの楽しさ、難しさ、つまらなさは自由記述を読み取り

『バレーボールは好きか』

好き…22名 やや好き…1名 やや嫌い…1名 嫌い0名

『バレーボールで楽しいと感じるとき』

- ・アタックを決めることができたとき・チームで協力して勝ったとき
- ・パスを上手くつなぐことができたとき

『バレーボールで難しさを感じる時』

- ・アタックができない、決められない ・パスが繋がらない
- ・ボールがすぐに落ちる

『バレーボールでつまらなさを感じる時』

- ・相手や味方と喧嘩になる、もめごとが多い

**資料2 コート図**

7	4	1	3	6	9
8	5	2	2	5	8
9	6	3	1	4	7

**資料3 特別ルール**

- ☆相手のアタックをキャッチしたら1点加算される。
- ☆ボールを1人1回触って、3回で返球する。
- ☆サーブは行わず、味方のパスからし合いを再開する。

自分のグループでの役割を考えながらプレーできるだろう。これらのルールの工夫により、仲間と関わり合いながら課題を解決することができるだろう。

### ③ 話し合い、教え合いの場の設定

単元の中で、グループごとにグループの課題を話し合ったり、グループの作戦を選んだりする場を設定する。話し合いの場で話し合ったことを、実践したり、試したりする時間も確保する。また、練習法もペアやグループでの活動を多く設定し、アドバイスし合えるようにする。グループの作戦を選ぶ場面では、作戦ボードを使い、考えを共有しやすくする。これらの話し合い・教え合いの場の設定により、仲間と関わり合いながら課題を解決することができるだろう。

#### (2) 仮説2に対する手だて

##### ① プロから学ぶ機会の設定

本実践では、デンソーエアリービーズの選手からご指導いただくことにする。児童たちは学習が進むに連れて技能を身に付け始める一方、ゲームがうまくいかなくなってくると考えられる。第5時に選手に来ていただき、バレーボールの基本技能のポイントや技能を身に付けるための練習法を紹介していただく。的確な基本技能のポイントを知ることによって、技能を身に付けることができるだろう。また、ゲーム中には、グループごとにアドバイスをしていただく。これにより、意欲的に運動に取り組み、技能を高めて、できる喜びを実感することができるだろう。

##### ② 練習方法の工夫

児童の実態に応じて、技能ポイントを明確に提示して練習に取り組むことで、技能を身に付けることができると考えた。単元の前半では、ゲーム中の動きの理解に特化したパターン練習を行うことで、身に付ける技能やゲームでの動きを明確にして取り組ませる。単元の後半では、課題別練習として、各グループに作戦表と練習メニュー（資料4）を配付し、自分たちに適した作戦を選択させ、自分たちでポイントを確認し合いながら練習できるようにする。これらにより、意欲的に運動に取り組み、技能を高めて、できる喜びを実感することができるだろう。

資料4 作戦と練習メニュー

#### 4 単元構想図（9時間完了）

時	学習内容及び活動						
1	<b>オリエンテーション</b> ○バレーボールの動画を見る。○グループの確認をする。○学習の進め方・ルールを確認する。 ○必要な技術を確認する。○準備運動、コーディネーショントレーニングを行う。○ドリル練習を行う。 ○試しのゲームを行う。						
2	<b>ねらい1 基本技術を身に付けて、キャッチバレーを楽しもう</b> 2時 ボールを落とさずにキャッチしよう。「なんでもキャッチ」 3時 ボールの落下点に入ってキャッチしよう。「数字キャッチ」 4時 次の動きを考えてボールの落下点に入り、キャッチしよう。「キャッチつなぎ」						
	めあて確認 グループごとに準備運動、COT (7分)	ドリル練習 (8分)	パターン練習 (13分)	ゲーム (10分)	ふり返り (7分)		
5	5時 プロバレーボール選手に困っていることを聞こう。 ○困っていること、うまくなるために知りたいこと聞く。						
6	<b>ねらい2 グループの力を高め、キャッチバレーを楽しもう</b> ○自分たちのグループに適した作戦を選択し、グループ練習を行う。						
7	めあて確認 作戦タイム グループごとに準備運動、COT (10分)	ドリル練習 (2分)	グループ練習 (10分)	リーグ戦 (7分)	話し合い (2分)	リーグ戦 (7分)	ふり返り (7分)
9	<b>キャッチバレー大会を行う</b> ○トーナメント戦を行う。						

#### 5 抽出児Aの今の姿と願う姿

児童Aは、運動能力は中程度。バスケットボール部に所属している。運動する機会は、部活動と体育の時間のみである。運動することに前向きであるが、自分から進んで友達からアドバイスをもらうことはあまりない。単元前のアンケート調査では、技能に自信がなく、バレーは「やや好き」と回答した。本実践を通して、仲間と関わり合いながら課題を解決して運動に取り組むとともに、ボール運動の技能を高め、グループ内での自分の役割を見つけ、運動に対する自信をもち、できる喜びを感じる姿を期待したい。

#### 6 検証の方法

仮説を検証するために、「練習やゲームの様子（行動観察・ビデオ記録・ヒアリング調査など）」、「学習ノートの記述内容」と「単元前後のアンケート」から児童たちの変容を分析する。

### Ⅲ 実践と考察

#### 1 長くつづくキャッチバレーをしたい

第1時に単元の流れを確認し、デンソーエアリービーズの試合の映像を視聴した（資料5）。児童たちは、プロのバレーボールをあまり見たことがなく、試合をとっても真剣に見ていた。視聴後、感想を聞くと、児童たちは、三段攻撃のすごさやチームの雰囲気よさなどを感想としてあげていた。児童Aは「ボ

資料5 試合を視聴する児童たち



ールがなかなか落ちない」と発言した。その後、コーディネーショントレーニング「落下点キャッチ」とドリル練習「なんでもキャッチ」「アタックキャッチ」を行った。クラス全体では、技能の個人差が大きかった。児童Aは、「落下点キャッチ」では、落下点に入り込むことができず、ボールを落としてしまうことが多くあり、困っている様子だった。試しのゲームでは、グループの仲間とうまくパスをつなぐことができず、アタックまでつなげられない状態であった。

児童Aは授業日記に「アタックが打ちやすい投げ方でやるのがむずかしかった」「長くつづくキャッチバレーをしたい」と書き、プロの試合を見て、自分たちもプロの選手に近づきたいという意欲的な気持ちを表した。

## 2 ボールをしっかりと見てキャッチするとい

単元前のアンケートによると、「アタックができない、決められない」「パスがつかない」など技能面の課題が多く見られた。そこで、単元の前半は、基本技能やゲームの中での動きを身に付け、アタックにつなげるために、キャッチとパスの技能ポイントを確認しながら授業を行った。教師が提示するパターン練習にグループごとに取り組み、ポイントについて教え合うなどのアドバイス活動の場を設けた。

第2時では、ボールをキャッチすることに焦点を当てた「なんでもキャッチ」に取り組んだ。相手コートからボールを投げ込んだりアタックを打ったりしてボールを打ち込みそのボールをキャッチし、すぐに味方へボールを回す練習を行った。児童Aの本時のめあては「アタックがきたらおとさずにキャッチしよう」であった。児童Aは、投げ込まれるボールはキャッチすることができていたが、アタックされたボールをキャッチすることに難しさを感じ、「アタックはどこに来るか分からない」と同じグループの仲間に話していた。そこで、児童Bから「ボールをよく見るといいよ」とアドバイスをもらった。アドバイス後、児童Aはボールをよく見ることを意識し、アタックされたボールを落とす回数が減ってきた。その後のゲームでも、ボールをよく見てどこへ飛んでくるか考えながらプレーすることができた(資料6)。ゲーム結果は10対6で負けてしまったが、6点のうちの3点は児童Aのキャッチで得点した。

資料6 ボールをよく見てキャッチする児童A



この日の児童Aの授業日記には、「アタックがうたれたらいろいろなところにボールが飛んでくるのでボールをしっかりと見てキャッチするといと分かりました」と書かれており、キャッチのこつを掴むことができたことが読み取れる。児童Aは、本時のめあてを達成するため、パターン練習でキャッチするために必要なことを仲間からアドバイスしてもらい、実践することでキャッチが少しずつできるようになった。グループでの教え合うアドバイス活動を取り入れたことで、児童Aは仲間からアドバイスをもらい、自己の課題を解決することができたと考えられる。

## 3 なんでもキャッチできるようになりたい

第3時は、落下点に入ってキャッチすることに重点を置いて取り組んだ。今回のパターン練習はコートに書かれた数字を活用した「数字キャッチ」を行い、相手コートからボールを打ち込む際に番号を伝えるようにした。その番号の書かれたエリアへさっと移動し、ボールをキャッチする体勢をつくることで、落下点へ入ることの意識をさせた。

児童Aは、前時でボールをよく見てキャッチすることができるようになったのでたくさんキャッチをしようと意気込んでいた。しかし、エリアに入ってもボールを目で追うだけで、無理な体勢でボールをキャッチしようと、取りこぼしてしまうこともあった(資料7)。そこで、「落下点に入る」とはどういうことなのか、グループで話し合った。児童Aは「手だけでは取れなかったな」と自分のできていないところに気付か、仲間に伝えた。その発言を聞き、児童Cが「体もボールの下、正面にないとだめだね」とアドバイスをした。そのアドバイスで納得した様子で「正面でキャッチするといいいのか」と言った。グループの課題に対して、話し合う中で課題解決の方法を考えることができた。その後、もう一度パターン練習を行うと、児童Aのキャッチの位置取りが変わった(資料8)。相手からのアタックだけでなく、味方からのパスも安定してキャッチできるようになり、トスに興味をもつようになった。児童Aの授業での姿から、グループでの教え合い活動を通して、仲間と関わり合いながら、課題解決に取り組むことができたと言える。

資料7 無理な体勢でキャッチをする児童A



資料8 落下点に入ってキャッチをする児童A



## 4 前へつなごう

第4時では、相手のアタックをキャッチした後の動きをパターン化した「キャッチつなぎ」を行った。これまでのゲームの様子から、児童たちは、どこからトスが上がると打ちやすいかを理解しておらず、後ろから上げられたトスを無理矢理アタックしていた。そこで、相手からのアタックがコートの8に落ちたとき、次の味方はどこにいたらよいかを考えさせた。児童Aたちのグループは味方が近くにいた方がパスをつなげやすいと話していた。実際に練習をしてみると、仲間が8でキャッチした後、児童Aが6でパスを受け、3にいるアタックを打つ仲間にトスを上げたがうまく打つことができなかった。その後も何度も同じようにアタックが打てない場面が続いた。そこで、教師がアタックへの3ステップ、「①後ろのゾーンでキャッチをする②前のゾーンにいる仲間にパスを出す③真ん中のゾーンにいる仲間が走り込んでアタックを打つ」という動きの例を示した(資料9)。その後、再びグループでの練習の時間を取った。児童Aは、後ろで取ったら前

資料9 教師が示した動きの例「アタックへの3ステップ」



にという意識をもつようになった。この日のゲームでは、どのグループもキャッチしたら前へつなぐ動きを意識していた。児童Aのグループは、「取ったら前へつなぐよ」と声をかけてゲームを行っていた。前方向からのトスで前時よりもアタックが決まる場面が増えた。児童Aも仲間がアタックをキャッチしたら前へ行く動きを実践できた（資料10）。

単元前半で毎時間技能ポイントを明確にしたパターン練習を行ったことで、児童たちはキャッチやキャッチからボールをつなぐ技能を身に付けることができた。

### 5 トスをがんばろう

第5時は、デンソーエアリービーズの選手（以下、選手）に来ていただき、単元前半を終えて、児童たちが困っていることを重点的に指導していただく機会を設けた。児童たちは、「トスがうまくいかない」「アタックにつなげられない」ことに困り感を抱えていた。第4時の振り返りに、児童Aは「わたしが見たいプレーは、本とうのバレーに近づいていくプレーです」と思いを書いた。第4時で動きの確認はできたが、まだアタックと結びついていない様子であった。そこで、アタックにつなげるための動きについて、キャッチを起点に組み立てていくことを指導していただいた。

まず、ウォーミングアップも兼ねて、1対1でネットを挟んで、決められたエリアにボールを落とし合うゲームを行った（資料11）。「落下点に入るために、すぐ動けるようにひざを軽く曲げて構え、準備が必要だ」と教わった。児童たちは、徐々に守るエリアを広げることで、落下点に入る動きの大切さを、ゲームを通して、再確認していた。次は、人数を増やし2対2で行った（資料12）。ここでは、仲間へのパスの要素が加わった。「どの位置でパスを受けると相手に返しやすいのか」を児童たちが考えながら取り組んだ。人数が増えたことで、なかなかボールが落ちなくなった。そこで、「ボールを落とすためには、相手をくずす必要がある」と教えていただいた。相手をくずすということは、相手に準備をさせないことであり、速いパス回しが必要になってくる。そのためにも、仲間同士が連動して動くことが大切だと気づくことができた。その後、児童たちがやってみたいと思っているアタックを見せてもらった。あまりの音と勢いに児童たちからは、歓声が上がった。その後、「アタックを打つためにどうしたらいいのか」と選手から問われ、児童たちは、アタックを打つために必要なことを考えながら、次のゲーム形式の練習を行った。相手のアタックをキャッチすること、アタックを打つために前にパスをつなぐことを連動して行うために、「相手の攻撃の時は下がり目に守り、自分たちが攻撃するときは前へ全員で動こう」とアドバイスをもらった。児童Aは、前時の動きと合わせて仲間と声を掛け合いながらゲームに取り組んだ。選手からもらったアドバイス通り、相手からのアタックのときは真ん中から後ろに下がって構えるようになった（資料13）。児童Aは、選手から「アタックを打つためにはトスが一番大事だよ」と個別にアドバイスをもらい、ゲームの中でトスを担うようになった。この日の児童Aの授業日記には、「アタックがきた時に、4・5・6に入っていればそのアタックがとれる」と書かれており、プロに学ぶ機会を取り入れたことで、キャッチするためのポジショニングを理解し、技能の高まりを感じられていることが分かる。また、個別でもらったアドバイスから、「トスをがんばろうと思いました」と自分の役割を意識するようになり、意欲を高めて次時からのゲームに向かおうとする気持ちがあがった。

### 6 本当のバレーボールに近づくとプレーをしたい

第6時から、ねらい2「グループの力を高め、キャッチバレーを楽しもう」に入った。グループ練習では、各グループに「守」「繋」「攻め」の3種類の作戦表とその作戦のための練習メニューを配った（資料14）。児童たちはグループでどの作戦でゲームを行うかを話し合い、そのために必要な練習に取り組んだ。その後、リーグ戦として2試合行うこととした。

第6時、児童Aのグループは、「キャッチミスをはらそう」をグループのめあてとして、「守① がっちり守り作戦」を選択した。自分たちのがんばりたいプレーを元に、ローテーションでコートに入るメンバーの役割やフォーメーションについても話をしてきた。「相手がアタックを打とうとしたら、4・6・8に下がろう」「キャッチできたら次もらう人は前へ行こう」と、それぞれの考えを伝え合った。児童Aは、グループのリーダーとして作戦ボードを使いながら考えを整理していた。

グループ練習では、練習メニューにある1対3の練習を行った。話し合いで出たフォーメーションを意識して、ボールが来る前は4・6・8辺りで構え、仲間がキャッチすると、1・2・3へ移動する姿が見られた。練習の最初は、自分の場所ばかりを気にしすぎて、ボールへの反応が遅れ、キャッチミスが多くなっていた。すると、児童Bが「守る場所も大事だけど、ボールもしっかり見ないと」とグループに呼びかけた。そのアドバイスによって、ボールの方へ意識が向くようになった。児童Aも第2時に児童Bから言われたことを思い出し、相手のアタックはいろいろな場所へ落ちることを再認識して、自分のポジションとボールの両方を意識して守るようになった（資料15）。

その日の試合では、どのグループも自分たちで選んだ作戦を実行しようと、フォーメーションなどを工夫してリーグ戦

資料10 前でパスをもらう児童A



資料11 1対1ボール落とし合い



資料12 2対2ボール落とし合い



資料13 後ろのゾーンでアタックを受けようとする児童A



に臨んでいた。

児童Aのグループは、相手のアタックをキャッチして点数を取ることを狙ってプレーした。しかし、相手のアタックに翻弄され、2試合とも負けてしまった。その後のグループの振り返りで、グループの課題に対して、児童Bの「どの辺にくるか考えないといけないね」と言う発言に、児童Aは納得した様子で「どこに来るか予想して落下点に入っておくといいのか」と言った。

児童Aのこの日の授業日記には、「落ちてくる場所がいろいろな場所に落ちてくるから、ボールの落下点をよそくしようと思います」と書かれており、グループの課題に対して、話し合う中で課題解決の方法を考えることができたことが読み取れる。

「アタックをキャッチすると1点加算される」というルールを工夫する手だてにより、児童たちは落下点へ入ることの大切さに気付き、ボールをキャッチしようとする意識を高め、得点につなげていこうと課題解決する姿が見られた。

第7時は、前時に引き続き児童Aのグループは、キャッチに重点を置き、「守① がっちり守り作戦」を選択した。グループ練習前の話し合いでは、前時のうまくいかなかったところを出し合い、作戦ボードを活用してさらに細かな動きの確認を行った。児童Aのグループの作戦ボードには、ローテーションで入るメンバーごとにポジションを割り振り、味方がボールをキャッチした後の動きが書かれていた(資料16)。児童Aは、本時の自分の役割はトスであると認識し、相手のアタックを4で待ち、味方がキャッチしたら1へ移動してトスを上げよう動きを考えた。

グループ練習では、ボールがいろいろな場所へ落ちるように投げ入れ、落下点に入ることを意識した練習を行った。考えた動きを実践に近い形でパターン化していた。児童Aは、仲間がキャッチしたあとすぐに1や2の位置へ動き、トスを上げた。しかし、トスが早いパスになってしまったりななめに投げてしまったりして、うまく上げられずアタックが打てないことがあった。そこで、アタックの役割を担うことが多い児童Dが、「少し高めの上にあげてくれると打ちやすいな」とアドバイスをしていた。その後、児童Aは、アタックが打ちやすくなるよう、高めのトスを意識するようになった。また、児童Bから「優しく投げてあげるといいね」とアドバイスをもらい、ふんわりとした優しいトスを上げることが増えた。

ゲームでは、トスをうまく上げられないことがあったが、グループの仲間から「大丈夫だよ」「切り替えて」と励まされ、仲間が打ちやすい優しいトスを上げられるようになっていった。自分がトスしたボールでアタックが決まると、グループの仲間と一緒に喜んでいく。

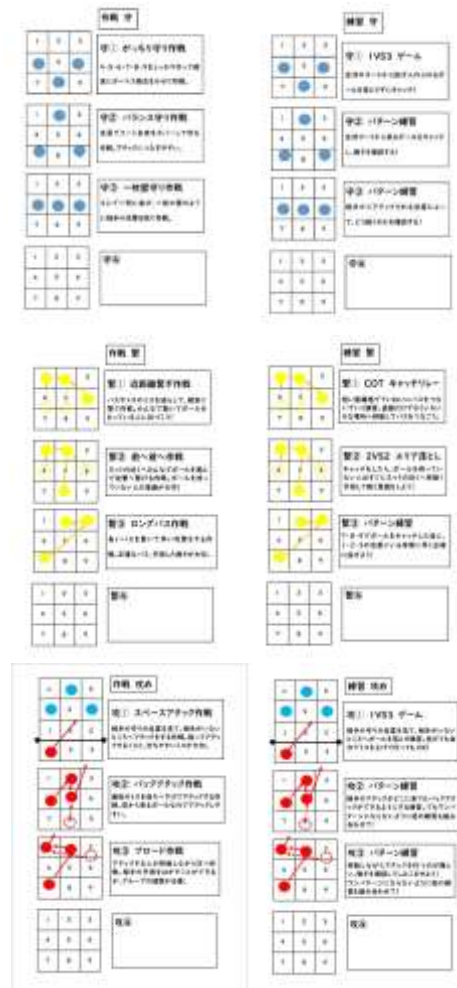
この日の児童Aの授業日記には、「アタックの人に打ちやすいトスができた」と書かれており、どのようなトスがアタックする人が打ちやすいのかを理解したことが読み取れる。

児童Aのグループは、コート図を示した作戦ボードを活用することで、それぞれの役割を明確にし、アタックまでの流れを確認し合い、協力し合って練習に取り組み、課題を解決することができた。

第8時では、児童Aのグループは「繋ぐ③ ロングパス作戦」を選択した。前時よりもアタックまでつなぐことに重点を置いていた。グループ練習の前の話し合いでは、フォーメーションの確認だけでなく、相手から返ってくるボールの落ちる位置についても話していた。児童Aは、「前の方にもボールが落ちることがあるから、そのときはどうしよう」とグループに問いかけた。その問いに児童Bは、「前のボールは前にいる人がキャッチして、前でパスを回そう」と発言した。それを聞いた児童Cは、「後ろから前にアタックした方がうちやすいもんね」とちがうパターンでのアタックまでの流れを提案した。これまでの試合の経験からボールの落ちる位置によって臨機応変にアタックまでつなげられるようにしようとしていた。グループ練習では、作戦が成功するようにロングパスを中心にパターン練習を行った。時折、エリアの1・2・3辺りに落ちるボールを混ぜ、そのような相手からのアタックが来たときの動きを確認していた。児童Aも手前に落ちるボールを投げ入れ、「3にいる人にパスをするんだよ」と声をかけていた(資料17)。仲間同士で声を掛け合い、様々なパターンに対応できるように練習する様子が伺えた。

この日のゲームは、リーグ戦の最終戦とクラス内順位決定戦であった。児童たちは、これまで以上に気持ちを入れて試合に臨んでいた。試合中にも、指示や励ましの声がたくさん聞こえた。児童Aのグループも、これまで練習してきたことを生かして、相手のアタックをキャッチして、自分たちのアタックにつなげて戦っ

資料14 作戦表と練習メニュー



資料15 児童Aのグループの変化



資料16 児童Aのグループの作戦ボード



た。失敗した時には「ドンマイ」、うまくいった時には「ナイス」と声をかけながらプレーをしていた。児童Aは、ネット付近に落ちるアタックをキャッチしたりアタックしやすいトスを上げたりしてグループに貢献していた。児童Aのグループのリーグ戦の結果は5戦行って1分け4敗だった。この結果に落ち込んでいる様子であったが、「最後の試合は勝とう」とグループで話し合っただけで気持ちを高めた。順位決定戦は、一度引き分けたグループと対戦し、勝つことができた。

児童Aの振り返りには、「ネットの近くにアタックがきてもキャッチできた」と書かれており、課題別練習で意識したことを試合の中で発揮できたことが読み取れる。また、「仲間がたくさんアタックをうってくれたのでたくさん点数が入りました」という記述から、グループでボールをつないで、仲間にたくさんトスを上げることができたことが読み取れる。ボールを1人1回触って3回で返すルールを設定したことで、児童Aは自分の役割を意識し、トスをするのでグループに貢献することができたと考えられる。

## 7 単元を終えて

単元後のアンケートを見ると、多くの児童が落下点に入ってボールをキャッチできる、単元を始める前よりも自信をもってプレーできると答えた(資料18)。その理由に、「エアリービーズの選手に教わったから」「仲間と一緒に練習できたから」が挙げられていた。これはプロの選手に教えてもらったことやパターン練習、課題別練習を設定したことで技能ポイントを明確にして取り組み、技能を高めることができたと考えられる。

また、全員が「仲間や相手と協力して学習を進めることができたか」「自分の役割にあったプレーができたか？」に対して「できた」と回答していた。これは、単元を通して工夫されたルールの中でコート図を用いて話し合いを積み重ねていったことで、自分の役割を自覚し、グループの課題を解決しようとする気持ちが高まっていったからだと考えられる。

児童Aは、単元最初のアンケートでは、バレーボールは「やや好き」と回答した。単元後のアンケートでは「好き」と回答した。また、「次、バレーボールの学習をするときは、どんなことを学びたいか」という質問に「相手のアタックがきたらキャッチしないでレシーブをしたい」と回答した。児童Aが一貫して思っていた「本当のバレーに近づきたい」という気持ちを感じ取ることができる。単元終えての振り返りに、「三年生のころはうまくつなげなかったけれど、四年生のキャッチバレーはうまくつないでたので、前よりもうまくなってうれしかった」と記述し、自身の技能の高まりを感じていることが伺える。また特にがんばったこととして「トス」をあげており、エアリービーズの選手に個別でもらった「トスが一番大事だよ」というアドバイスを受け止め、単元後半は意識してプレーしていたことが読み取れる。

## IV 研究の成果と今後の課題

### 1 研究の成果

#### (1) 仮説1について

グループで教え合いながら技能を身に付ける場を設けることで、児童Aは仲間からのアドバイスを受けて基本技能を身に付けることができた。また、毎時間の振り返りやグループ練習において話し合いの場を設定することで、児童Aは、自分の技能の高まりを認めながら学習を進めることができた。さらに、コートを図に9つにエリア分けを行ったことで、自分の位置や役割、アタックにつなげるための動きを考えながらプレーすることができた。作戦タイムでは、作戦ボードを用いて、守備のポジションを確認したり、相手からのアタックをキャッチした後の動きをシュミレーションしたりする姿が見られた。そして、特別ルールを設定したことで落下点に入ってボールを落とさずキャッチするにはどうするといった課題とし、グループ練習や話し合いを通して課題を解決した。仲間とパスをつないでアタックを決める喜びも分かち合うことができた。

これらのことから、ルールやコートを工夫したり、教え合いや話し合いの場を設定したりすることで、仲間と関わり合いながら課題を解決することができたと言え、仮説1は妥当と考えられる。

#### (2) 仮説2について

本実践では、プロに学ぶ機会を設定した。児童たちが困っているところを中心に落下点へ入るためのポジションの取り方やアタックにつなげる動き方を教えてもらったことで、グループの技能を高めることができた。単元前半では、ゲーム中の動きの理解に特化したパターン練習を取り入れ、技能ポイントを明確にし、技能の習得方法を工夫した。そのことにより、グループ内でポイントをお互いにチェックしながら技能を身に付け、高めることができた。さらに、課題別練習として、各グループに作戦表と練習メニューを配付し、自分たちに適した作戦を選択させ、自分たちでポイントを確認しながら練習を行うことで、自己やグループの技能の高まりを感じることもできた。

これらのことから、プロから学ぶ機会を設けたり、パターン練習やグループ練習など練習方法を工夫して実施したりすることで、意欲的に運動に取り組み、技能を高めて、できる喜びを実感することができたと言え、仮説2は妥当であると考えられる。

### 2 今後の課題

本実践では、他のグループとの関わり合いが少なかった。今後は他のグループとの交流を図る機会を作り、より多くの児童と関わり合う単元構想も考えていきたい。

また、技能を高める場において、視聴覚機器を活用することで、客観的に自己やグループの動きを分析して、より技能を高める方法を工夫したい。

資料17 手前にボールを投げ入れる児童A



資料18 単元後のアンケートの結果

『落下点に入ってボールをキャッチできますか?』

できる…23人 できない…2人

『単元を始める前よりも、自信をもってプレーできますか?』

できる…24人 できない…1人

(できると思う理由)(自由記述)

- ・エアリービーズの選手に教わったから。

- ・仲間と一緒に練習できたから。

- ・キャッチしたら1点入ったから。

『仲間や相手と協力して学習を進めることができたか?』

できた…25人 できなかった…0人

『自分の役割にあったプレーはできたか?』

できた…25人 できなかった…0人